

2 壁を背にした、ほの暗い灯の下で（私の愁いは一層深まり）眠りにつくことが出来ない。

3 秋の到来を告げる早雁の声を聞いた時も、秋の深まりを知らせる寒蟬の声を耳にした時も、その鳴き声は例年のそれと少しも変わるものではなかった。

4 （なのに）今年の秋だけは幼かった我が子の書物を読む声が聞かれないのである（ことが、たまたまなくつらい。）

〔童子とは年かさの行かない幼い子の呼び方である。この幼子を近ごろ亡くなってしまった。〕

この「503秋夜」は『菅家後集』の編集事情より鑑みるに、既に論じて来たように、大概是、時系列に配列されている。とすれば、この詩は、太宰府左遷二年目、つまり二度目の秋を迎えた中で詠作されていると考えられる。道真の死がすでに半年後に迫っている頃のものである。「483慰少男女」が詠まれてほぼ一年後の出来事と考えられる。

この詩の読後感を一言で記すならば、「寂寥感」もしくは「惨憺感」といったものであろう。いとしい我が子を亡くして、その悲しみや苦悩を詩に託す気力が、道真にはことごとく削り落とされている印象を抱く。我が子の死と迫りくる我が身の死とが異次元のものではないといった諦念がこの詩の根底に流れているように思えてならない。そして、それが、一層、重く、悲痛さを、読み手に訴えていることが、次の、道真三十九歳のころに詠まれた次の①「117夢阿滿」の詩と比較すれば、合点がいく。

次に引くこの①「117夢阿滿」は岩波日本古典文学大系本の補注で川口久雄氏が指摘するように「〔阿滿〕は固